HOKUSEI@COM

2009・AUGUST
vol.8

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY
COMMUNICATION MAGAZINE SUMMER EDITION

北星学園大学
北星学園大学短期大学部

02-03
[特集]
(株)クラッキ 代表取締役／
元コンサドーレ札幌キャプテン
野々村 芳和さんインタビュー
サッカーで
子どもたちに夢を、
街に元気を届けたい。

04
[学生たちの素顔]
やちっこ野菜村☆秋の大収穫菜
いのちを育てて、
いのちを学ぼう。

05
[サークル活動]
ラクロス部
エキサイティングな
“地上最速の格闘球技”に
夢中!

06
[先生たちのその素顔]
社会福祉学部　木下 武徳先生
誰もが人間らしく
生きられる社会を
めざして。

07
[教育・研究活動]
心理臨床センター
北星こころの相談室
心の扉を
ひらく第一歩を、
ここから。

08
[HOKUSEI INFORMATION
北星学園大学からのお知らせ]
プロジェクト
北星学園大学
オリジナルワイン
プロジェクト進行中!
☆社会福祉夏季セミナー
☆大学公開講座
☆北星オープンユニバーシティ

［特集］ INTERVIEW

(株)クラッキ 代表取締役／元コンサドーレ札幌キャプテン
野々村芳和さんインタビュー

サッカーで子どもたちに夢を、街に元気を届けたい。

札幌市西区宮の沢・コンサドーレ札幌の専用練習場「宮の沢白い恋人サッカー場」。かつてコンサドーレ札幌のキャプテンとしてこのグラウンドで汗を流した野々村芳和さんは、スポーツテイストのモノトーンスタイルにハンチングという洗練された着こなしで現れました。現役時代から現在のお仕事、来年のワールドカップの話まで、ふたりの女子学生が徹底インタビュー。思わぬ裏話まで飛び出し、賑やかな取材となりました。

安定したパフォーマンスとメンタリティが勝負を決める。

清水：野々村さんは現在サッカー解説者やコンサドーレ札幌のチームアドバイザーとして活躍されていますが、最近の日本のサッカーシーンをどう見ていますか?

野々村：日本にプロのサッカーリーグが誕生して17年。日本代表も、トルシエ監督は守備中心のヨーロッパ型、ジーコ監督は攻撃主体の南米サッカーと、最初は海外サッカーに倣(なら)ってきたのですが、オシム監督からようやく日本らしい戦い方が見えてきた。その流れを受けた岡田監督が来年のワールドカップでどんな戦い方を見せるのか、興味深いですね。

成田：地元コンサドーレ札幌はいかがでしょう?

野々村：勝ち数こそ少ないけれど、試合の内容は悪くない。プロサッカーはただ勝てばいいというものではなく、お金を払って観に来てくれる観客を楽しませなくてはなりません。現在のコンサドーレ札幌には“見る面白さ”があります。それが結果に結びつくことを期待しています。

成田：野々村さんご自身も現役時代に“試合に勝つこと”と“見る面白さ”のジレンマはありましたか?

野々村：もちろんありました。特にプロになって間もない頃は思うような試合運びができず、90分の間にどんどんパフォーマンスが落ちてしまう。1試合終わると体重が4キロ減ることも珍しくなかったですね。次の試合に向けて体重を戻すため、ひたすら食べ続けなければならないのがつらかった。そんなことを1年ほど繰り返すうちに安定したパフォーマンスを維持できるようになり、試合内容が結果に結びついてきました。今のコンサドーレ札幌の若い選手は、そういうプロサッカーのリズムを定着させることが課題でしょうね。

清水：私は高校時代に陸上選手として全国大会に出場した経験があるのですが、身体的なパフォーマンスと同時に精神的な強さが不可欠だと実感しています。サッカーではどういうメンタリティが求められるのでしょうか?

野々村：たとえば自分のミスで得点されてしまったとき、精神的に大きなダメージが押し寄せます。そして自信がなくなり、ボールが回ってくるのが怖くなる。こうなるともうダメです。何が起こっても精神的な振り幅はなるべく小さく抑え、安定したメンタリティと70%のパワーを90分間保ち続けることのできる選手、それが勝てる選手だと思います。

自らの経験を通して、子どもたちに伝えたいこと。

成田：野々村さんが経営する(株)クラッキでは、サッカースクールでの子どもたちへの指導においてもメンタルトレーニングを重視していると伺っています。

野々村：それは僕自身の経験に基づいています。中学時代から試合になると心拍数が上がってしまい、ゲームに出られないこともあったんです。プレッシャーに弱い自分が嫌で、呼吸法を工夫して心拍数をコントロールするなど、自分なりにメンタル強化をはかってきました。ところが20歳のときに心臓疾患が見つかったんです。ずっと悩んでいた“本番に弱い自分”は病気の発作だったとわかり、むしろうれしかった(笑)。病気と知らずにメンタルトレーニングを実践していたことで、メンタリティの重要性も再認識しました。こうした経験を子どもたちの指導にも活かしています。3分間グラウンドに横たわったあとハイテンポの音楽を流しながら練習したり、穏やかな心と高揚している心の差を体で理解することで、バランスのよい心を維持できるようになっていきます。人は年齢とともにストレスや理不尽なことが増えていくものですが、それらをやみくもに避けるのではなく、負けずに受けとめて消化できる大人に成長してもらいたいですね。

PROFILE

野々村（のの むら）　芳和（よし かず）

1972年、静岡県生まれ。清水東高校、慶應義塾大学を経て1995年にジェフユナイテッド市原（現千葉）に加入。
2000年、当時の岡田武史監督（現日本代表監督）に誘われ、コンサドーレ札幌へ移籍。キャプテンとして同チームをJ1昇格へ導く。
2001年に現役引退後は札幌チームアドバイザー、サッカー解説者として活躍する傍ら、サッカーによる社会貢献をめざし2006年に（株）クラッキを設立。さらに慶應義塾大学講師やHBCテレビ『のんのん。』レギュラー出演など幅広い分野で活躍中。

文学部英文学科 2年
清水（しみず）あかね
私自身アスリートとしての経験があるため、野々村さんが重視するメンタリティにとても興味がありました。コンサドーレ札幌のゲームや来年のW杯がますます楽しみです!

文学部英文学科 2年
成田（なりた）桜子（さくらこ）
とにかく気さくな方!サッカーやビジネスに関する話題はもちろん、ファッションへのこだわりやテレビ番組の裏話なども披露してくださり、あっという間の1時間でした。

清水:野々村さんは母校・慶應義塾大学の講師も務めていらっしゃいますが、私たち大学生についてどう感じていらっしゃいますか?

野々村:基本的に僕たちの頃と変わらないけれど、目標意識がやや弱いかな。就職難という時代背景もあるけれど、最初から諦めてしまわず、自分の持ち味を理解し、それを活かせる目標に向かって努力してほしい。そのためにはやはり、多少の挫折では揺れない強いメンタリティが大切ですね。

スポーツが生活の一部になる喜びを広げたい。

清水:野々村さんは現役時代はキャプテンとして、現在は（株）クラッキの代表取締役社長としてリーダーシップを発揮されていますね。

野々村:性格も生活環境も違うさまざまな人間をひとつの目標のもとにまとめあげていくという点では、チームも会社も同じだと思っています。ただ、チームの場合は「試合に勝つ」という全員共通の目標があるのに対して、会社の場合は会社全体の利益と個々の報酬と、目標にずれが生じることが少なくありません。社員全員の努力が会社全体に利益をもたらし、それが結果的に一人ひとりに還元されていくしくみをスムーズに動かすためには、一人ひとりのモチベーションを上げるためのインセンティブが不可欠。（株）クラッキのサッカースクールは元Jリーグ選手による指導が特長ですが、未来のサッカー選手を育てることは、彼らにとってお金を超えたやりがいと満足をもたらしてくれるものだと思います。

成田:今後のビジョンをお聞かせください。

野々村:サッカーを通じて子どもたちの心身の健やかな成長をアシストすることに加え、今後は世代を超えた地域のスポーツ振興にも関わっていきたいと考えています。今春発足したばかりの社会人サッカーチーム「小樽FC」もそのひとつ。引退した元コンサドーレ札幌の選手も所属していて、「おたる潮まつり」にも参加するなど地域交流をはかっています。今年末には札幌でフットサルコートの運営もスタート予定。こちらも元コンサドーレ札幌の選手をスタッフに登用するなど、引退した選手のセカンドキャリアのステージとしても機能させていきたいですね。

清水:現役引退後も今なお札幌のスポーツ振興に尽力してくださるのはうれしい限りです。最後に札幌市民へメッセージをお願いします。

野々村:クラブチームを持てる街はカッコいい! コンサドーレ札幌というブランドに愛情と自信を持って応援してもらえたらうれしいし、自分もやってみようと思ってもらえたらもっとうれしい。スポーツが生活の一部になる喜びを、ひとりでも多くのみなさんに味わってほしいと願っています。

清水・成田:本日はありがとうございました。

学生たちの素顔
Our students: A closer look

［やちっこ野菜村☆秋の大収穫菜］

いのちを育てて、いのちを学ぼう。

北星学園大学にほど近い住宅地の一角、ここが「やちっこ野菜村」。小さな小さな村を運営するのは、ふたりの女子学生。そしてたくさんの野菜たちを大切に育てているのは、大谷地東小学校の子どもたち。学生のアイデアから始まった地域密着食育プロジェクトをご紹介します。

文学部 心理・応用コミュニケーション学科
3年 内海（うつみ） 彩加（あやか）さん

文学部 心理・応用コミュニケーション学科
3年 高田（たかだ） 有里子（ゆりこ）さん

生産者の心と食の大切さを、子どもたちに伝えたい。

事の始まりは昨年9月。高田さんと内海さんが参加した大学のフィールド実習でした。長沼町の農家に泊まり込み、農作業に没頭した1週間。「作業は想像以上に辛く、何度も帰りたくなりました（笑）。でも作業を終えて食べる食事のおいしさに感激し、いつも目にするスーパーの野菜も農家の人々の大変な苦労の賜物なのだと実感。私自身が農作業を通じて気づいた生産者の思いや食の大切さを、成長期の子どもたちにも知ってもらいたいと思ったのです」と高田さん。もともと食に関心があるという内海さんも「どの野菜も味は同じなのに、多少形が悪いだけで売り物にならなくなるという現実を知り、ショックを受けました。食に対する偏見をなくし、生産者の心とともにおいしくいただく喜びを子どもたちに伝えたいと思いました」と、「やちっこ野菜村」プロジェクトの動機を語ってくれました。

学生ならではの感性で、“食学”の輪を広げたい。

「やちっこ野菜村」に参加しているのは、大谷地東小学校の5・6年生14人。高田さんと内海さんのゼミの先生の畑をお借りして、長沼町の農家や育苗（いくびょう）会社などのアドバイスも受けながら、ニンジン、ジャガイモ、タマネギ、ミニトマトなどさまざまな野菜を育てています。楽しみながら食物を育てることの意義と責任を学んでもらおうと、オリジナルの生育ノートや「すくすく体操」「やちっこかるた」など、学生ならではのユニークな企画も満載です。「子どもとの接し方に悩んだり、子どもの変化に感動したり、心理学やコミュニケーションの観点からも学ぶことがたくさんあります」と語る高田さんと内海さん。彼女たちは、自らが野菜を育てることで「食」を学ぶことを“食学”と呼んでいます。大谷地に蒔かれた“食学”の種が大きく成長し、いつか大谷地から北海道へ、全国へ広がり、実を結ぶこと。それがふたりの願いです。

日頃学んでいる心理学が子どもへの接し方やコミュニケーションに活きています。

6月下旬のジャガイモ。今年は気温の低い日が多いけれど無事に育ちますように。

みんなで野菜クッキング。役割分担しながら初めてのタコス作りに挑戦です。

皮も具もソースも手作りのタコスが完成！子どもたちの笑顔がおいしさの証しです。

CIRCLES

汗と、涙と、友情と。

［ラクロス部］

エキサイティングな“地上最速の格闘球技”に夢中!

17世紀にアメリカで生まれたスポーツ、ラクロス。日本では1986年、慶應義塾大学の学生が見よう見まねで始めたのを機に、大学生を中心に全国へ広がっていきました。北星学園大学ラクロス部は女子13年目、男子5年目。若いチームらしい元気いっぱいの活動ぶりをご紹介します。

アグレッシヴなぶつかり合いが持ち味の男子ラクロス。

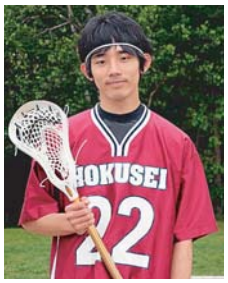
迫力とスピード、シュートの快感。ラクロスの魅力に男女の区別なし。

男子51名・女子26名と多くの部員を抱える北星学園大学ラクロス部。道内の高校にはラクロス部がないため全員が初心者とのことで、今回集まってくれた3人も、高校時代は卓球部(稲船さん)・サッカー部(平塚さん)・吹奏楽部(上野さん)と三者三様です。「だからこそみんなで協力しあい、励まし合える。みんな同じスタートラインから始めるので、いい意味で上下関係がなく、男女とも仲がいいんです」と部長の稲船さんは語ります。

ラクロスは、先端に網のついたスティック(クロス)でボールを奪い合い、相手ゴールに入れて得点を競うスポーツ。女子の場合、テニスのようなかわいいユニフォームに憧れて入部する人も多いのですが……「私もそのひとりだったのですが、実際は青アザが絶えないほどハードなスポーツ。見た目で判断してはいけません(笑)」と女子主将の上野さん。男子はさらにハードで、ヘルメットや防具を着用してクロスで相手のボールを叩き落としたり、激しくタックルしたり、まるでアメフトかアイスホッケーのよう!「シュートは時速160kmを超えるほどで、“地上最速の格闘球技”と呼ばれています。その迫力とスピード感こそがラクロスの魅力です」と男子主将の平塚さん。上野さんも「ディフェンスをかいくぐってシュートを決める快感がたまりません」と、全員すっかりラクロスに夢中のようすです。

当面の目標は男女ともに秋季大会優勝、そして夢は全国進出!「ラクロスを知らない人でも、エキサイティングなゲームは観るだけでも楽しめるはず。ぜひ試合に足を運んでいただきたいですね」と稲船さん。まだ歴史の浅い北海道のラクロスを盛り上げようと、北星学園大学ラクロス部は、今日もクロスを手にグラウンドを駆け回っています。

ラクロス部 部長
稲船(いなふね) 太謙(たかのり)さん
経済学部経済学科 3年



ラクロス部男子 主将
平塚(ひらつか) 祐樹(ゆうき)さん
社会福祉学部福祉心理学科 4年

ラクロス部 副部長・女子 主将
上野(うえの) 彩(あい)さん
文学部心理・応用コミュニケーション学科 3年

網の中のボールを遠心力でクルクル回す特有の動作「クレードル」。

防具を使用しない女子ラクロス。多少のアザは覚悟の上。

小さめのゴールにシュートを決める喜びはひとしおです。

マネージャーもいっしょにパチリ。みんないい笑顔です。

Featured Faculty Member

先生たちのその素顔

●社会福祉学部　木下武徳先生●

誰もが人間らしく生きられる社会をめざして。

PROFILE

きの した　たけ のり
木下 武徳

1997年3月　京都府立大学文学部社会福祉学科卒業
1999年3月　同志社大学大学院文学研究科社会福祉学専攻博士（前期）課程修了
2002年3月　同志社大学大学院文学研究科社会福祉学専攻博士（後期）課程満期退学
2002年4月　日本学術振興会特別研究員
2004年4月　北星学園大学社会福祉学部福祉計画学科専任講師
2005年7月　博士（社会福祉）を同志社大学より授与
2007年4月　北星学園大学社会福祉学部福祉計画学科准教授
2008年10月　著書『アメリカ福祉の民間化』（日本経済評論社・2007年3月）により日本社会福祉学会 学会賞（奨励賞）受賞

「働いて生きる」ことの希望が見えない時代。

最近、本学学生や受験志望の高校生に「最も重要だと思う基本的人権とは」と質問すると「生存権」という答えが多いことに驚きます。生存権の重要性が認識され良かったと思う反面、夢や自由にあふれているはずの若者が人間として最低限「生きる」ことにすら不安を覚える社会に、疑問を覚えます。近年は「ワーキング・プア」という言葉も一般化しましたが、貧困の問題は昔から変わらず存在しています。イギリスやアメリカでは1960年代に「貧困の再発見」のムーブメントが起こりましたが、日本は1980～1990年代に“一億総中流時代”に突入。誰もが自らを中流と意識する社会の中で貧困の問題は表面的に見えにくくなっていき、やがてバブルを迎えた一見豊かな社会の背後で、徐々に格差社会が進行していったのです。2000年以降の日本では、労働格差の広がりや母子家庭の貧困、介護問題などさまざまな社会問題に伴い、“働いて収入を得る”という生活の基本が成立せず、貧困に陥っているケースが少なくありません。このような人々こそがほんとうに社会保障を必要としているのに、生活苦から国民年金や健康保険を払えないために保障を受けられず、貧困から逃れられなくなるという悪循環が生じてしまいます。

底辺からの視点が、貧困問題解決への第一歩。

貧困がさらなる貧困を呼ぶ“負の連鎖”をどこかで断ち切らなければ、すべての人が幸せな社会は築けない。そのために自分に何ができるのか、自らに問うとき私はいつも大学時代の恩師の言葉「底辺に向かえ!」を思い出します。社会保障や福祉などの制度について、それらの助けを切実に必要としている“底辺”の視点から検証し、現状と課題を見きわめること。それが貧困問題解決への第一歩だと考えています。たとえばホームレス問題もそのひとつ。ホームレスに至る背景はその人自身の責任だけでなく、さまざまな社会的要因が深く関わっています。現在札幌市内で確認されているホームレス人口は99人ですが、ネットカフェやコンビニなどを転々としている人を含めると、実際はもっと多いと思われます。私が現在代表を務める「北海道の労働と福祉を考える会」では、本学をはじめ札幌市内の各大学の学生が集まり、ホームレスの人のための相談や炊き出しなどのボランティア活動を行っています。とはいえ貧困問題はますます深刻化が予想されており、一団体でできることには限度がある。そこでより多角的で有効な支援活動を展開するために、道内や札幌市内の関係組織や団体などが連携するための「反貧困ネット北海道」を立ち上げました。誰もが人間らしく生きられる社会を実現するために、北海道での取り組みはまだ始まったばかりです。

［日本社会福祉学会 学会賞授賞式］
（2008年10月12日）

同賞は、社会福祉研究の一層の発展を図るため、学会員のうちで顕著な研究業績をあげた者の顕彰および若手研究者の研究奨励を目的に創設され、創立5年目にして、木下先生を含む本学の教員が4人受賞しています。

路上生活者への炊き出し。これも底辺の視点から考える契機のひとつ。

面接室と子どもの心理療法を行うプレイルーム。

［教育・研究活動］

北星学園大学心理臨床センター

北星こころの相談室

心の扉を ひらく第一歩を、 ここから。

うつや引きこもりなど、心の問題がクローズアップされる時代。
北星学園大学心理臨床センターが開設している
「北星こころの相談室」について、
同センター長・佐藤至子先生に伺いました。

心理臨床センター
北星こころの相談室
センター長
佐藤（さとう） 至子（よしこ）教授

関東の医療機関を経て2008年4月に本学教授に着任した佐藤先生。「自分自身の心の変化も見えなくなりがちな現代、じっくりと自分の心と向き合ってみることはとても大切で有意義な時間です。どうぞお気軽にお電話ください」

臨床心理学に基づく、こころの相談室。

「北星こころの相談室」は、心の問題や悩みを抱えている地域の方々のお役に立ちたいという願いから、2005年に開設されました。また、本学大学院社会福祉学研究科・臨床心理学専攻では「臨床心理士」の養成に力を入れており、心の専門家をめざす学生たちの実践・研究の場としての意義も有しています。相談にあたっては「臨床心理士」の資格を有する教員の指導のもと、専門的訓練を受けた大学院生などが担当。カウンセリングを中心とする心理療法を1～2週に1回ずつ継続して行います。心の問題は一朝一夕で解決するものではなく、時間がかかるもの。相談者自身が「もう大丈夫」と納得できるまで、期間は人それぞれです。数回ほどの方から2～3年通われる方まで、さまざまなケースがあります。

箱庭療法などさまざまな心理療法を通して心の深部にふれていきます。

ともに考え、ともに歩む、心の伴走者として。

自分の心、自分の未来が見えにくくなってしまうとき、人は「これからの自分があること」に自信が持てなくなってしまうのでしょう。とくに周囲からいい子、真面目、仕事ができるなどと評価されている人は、無意識に頑張りすぎてしまいがち。ときには弱い自分も認めてあげて、ゆっくりと自分と向き合うことが大切です。

家族や友人に打ち明けられない心の悩みも、日常生活と少し違った空間の中だからこそ見直してみることができるのではないでしょうか。また、「病院での診察を受けたいけれど不安」という方にも、心の扉をひらく第一歩として気軽に相談していただきたいですね。臨床心理士は「こうすれば悩みが解決します」という答えを提示することはありません。私たちは、いわば悩む人の「心の伴走者」。悩みに耳を傾け、いきづまった心に寄り添い、ともに悩みに向き合いながら、相談者が自分で答えを見つけるためのお手伝いをしていきたいと思っています。

［たとえば、こんなお悩みにお応えします］

- ●子どもの悩み
  不登校やいじめ、家庭内暴力、夜尿など
- ●心の悩み
  不安、抑うつ、対人緊張、摂食障害など
- ●家庭の悩み
  親子・夫婦・家族関係など
- ●仕事の悩み
  仕事に行けない、職場の人間関係など

※ご相談内容により当相談室でお引き受けできない場合があります。その際には適切な相談機関をご紹介いたします。

［お申し込み方法］

ご相談は予約制となっております。
まずはお電話でお申し込みください。

- ●お申し込み先／(011) 802-3822
- ●受付時間／月・水・木・金 10:00～16:00
  ※祝日、大学の休日、年末年始、夏季・冬季休暇などにより休室になることがあります。
- ●相談面接／原則として週1回50分
- ●相談料金／初回面接3,000円、2回目以降2,000円

※ご相談内容や個人情報については秘密を厳守いたします。
※比較的小規模なセンターですので、相談の予約状況等によってはお待ちいただくことがあります。
最新の状況は本学公式ホームページ内「北星こころの相談室（心理臨床センター）」でご確認願います。

HOKUSEI INFORMATION 北星学園大学からのお知らせ

SEMINAR

ニーズに応える社会福祉の実践に向けて。

第42回 北星学園大学社会福祉夏季セミナー

ソーシャルワーク実践の到達点と新たな可能性

社会の変化とともに社会福祉をめぐる制度も激変する時代。生活不安が高まるなか、強く求められている社会福祉の実践理論「ソーシャルワーク」について、歴史的な経緯や今後の可能性、展望などについて学ぶセミナーです。

- ●日　　程／8月29日(土)・30日(日)
- ●会　　場／北星学園大学内教室
- ●定　　員／140名(定員になり次第締め切ります)
- ●参加対象者／社会福祉に関心を持ち、期間中受講できる方
- ●受　講　料／3,000円(2日間セットの受講料となっております)
- ●申 込 締 切／8月19日(水)必着(申込書及び受講料入金)

本学のホームページでご案内中です。

※写真は昨年行われたセミナーの様子です。

OPEN CLASSES

もうひとつの世界は、あなたのそばにある。

第35回 北星学園大学公開講座

Another World ～ことばが紡ぎだすもの～

sky、himmel、ciel、天空、하늘…同じ「空」も国が変われば名前が変わる。同じ言葉や絵画、物語も、時代や空間が変われば全く違う姿に生まれ変わります。視点を変えることで見えてくる“もうひとつの世界”を探しに来てみませんか?

- ●講　　師／本学専任教員［棚瀬 江里哉（英語）、山本 範子(中国語)、高橋 百代（フランス語）、ジェームス・E・アリソン(英語)、佐藤 修子(ドイツ語)、高島 淑郎(韓国語)］
- ●日　　程／9月18日(金)～10月23日(金)18:20～19:50(全6回・毎週金曜日)
- ●会　　場／北星学園大学内教室
- ●定　　員／200名（定員になり次第締め切ります）
- ●受 講 料／一般2,000円(全期間セットの受講料となっております)
- ●申込締切／9月4日(金)必着(申込書及び受講料入金)

本学のホームページでご案内中です。

※写真は昨年行われた公開講座の様子です。

OPEN UNIVERSITY

新たな世界が広がる、社会に開かれたオープン講座。

北星オープンユニバーシティ

語学や資格取得の生涯学習を通じ、人材育成、交流の場を提供

社会人、卒業生に在学生も交えた生涯学習の機会として多彩な講座を開講しています。後期は10月13日(火)より、新規講座を含め50講座の開講を予定していますので、皆さんの受講をお待ちしています。

※写真は今年行われた地域連携講座の様子です。

- ●申込期間／9月1日(火)～9月24日(木)
- ●募集講座／「語学」「資格取得対策」「文化教養」「ビジネス・社会連携」「キリスト教学」など
- ●申込方法／募集講座の詳細は8月下旬にホームページでご案内しますので、インターネットでお申し込みください。

北星オープンユニバーシティ　検索

http://www.open.hokusei.ac.jp

ホームページでご確認いただけない場合は、エクステンション課へパンフレットをお電話でご請求ください。無料で送付いたします。

TOPICS

北星ヌーヴォーで乾杯を。

プロジェクト

北星学園大学 オリジナルワインプロジェクト進行中!

本学経済学部経営情報学科の西脇ゼミでは現在、キリスト教主義大学ならではのオリジナルワイン醸造プロジェクトが進行しています。ワイン醸造用ブドウの生産量No.1を誇る北海道産ワインのブランド力(りょく)アップを目標に、北海道ワイン(株)とその直轄農場である鶴沼ワイナリーのご協力のもと、4月からプロジェクトが始動しました。浦臼町にある鶴沼ワイナリーのブドウ畑の一区画で、16名の学生たちがブドウ栽培をお手伝い。収穫したブドウは小樽の醸造工場でワインにしてもらい、11月初旬に完成予定です。

また、毎年8月末に浦臼町が主催していた「ワインの里フェスティバル」に代わり、今年は鶴沼ワイナリーによるイベント開催が決定。その企画を西脇ゼミが手がけることになりました。予定外の展開ながら、学生たちは成功に向けて奮起しています。

北星学園大学オリジナルワインは限定500本、2本セット￥3,150(税込、送料別)で250セット(学生が編集した小冊子付き)販売予定。8月下旬頃から予約受付開始予定です。学生たちの熱い思いが熟成したおいしさをぜひご賞味ください。

●HPでもご案内中　http://www.ipc.hokusei.ac.jp/~z00508/

各セミナー、講座、オープンユニバーシティ お申込み・お問合せ先　北星学園大学 エクステンション課（C館1階）　Tel.011-891-2731(代表)　Fax.011-896-8311(直通)

Hokusei Gakuen University 北星学園大学 北星学園大学短期大学部

発行／広報委員会
〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2丁目3番1号
TEL 011-891-2731(代表)
URL http://www.hokusei.ac.jp
E-mail kikaku@hokusei.ac.jp

【広報誌「HOKUSEI@COM」】
タイトルの「COM」は「COMMUNITY(地域社会)」「COMMUNICATION（コミュニケーション)」の頭3文字を取ったもので、本誌が北星学園大学と地域のみなさまを結ぶ架け橋となるように、との願いをこめたネーミングです。

PRINTED WITH SOY INK